参考資料１

第７次山形県教育振興計画検討委員会（第５回） 発言概要

（第７次山形県教育振興計画検討委員会 委員名簿順）

【池田委員】

○　一緒に体験することで、本物に触れたり、時間を共有したりすることができ、「そうなりたい」という心を育て、目指すものの選択肢が増え、可能性を広げることにつながる。そのためには、山形の魅力や様々な文化などの「本物」をたくさん集めて、様々な機会で触れていくことが大切である。

○　子供の視点も重要ではあるものの、「県民みんなでチャレンジ！」という旗を掲げていくのであれば、大人もウェルビーイングについて、話す、考える、共有する、体験するが大切になる。

○　「なんで」から「なぜならば」が導き出されて、だから「こうする」という行動変容につながる。骨子案の内容について、「なんで？」から「なぜならば」と考え、「だからね」というストーリーがあると県民に伝える時に、必要感を持ってもらえる。

○　コーディネートについては、引っ張っていく、一緒に作っていく人が必要。

○　取組みの評価について、６教振とは違う新たな評価を作り上げるべき。

○　実施する側が発育発達に応じた視点を持ち、その子に必要な発育発達に応じた活動ができる環境をしっかりと提供できることが必要である。

○　チャレンジ４の協働の「みんな笑顔で」について、笑うと免疫力が高まる研究結果が出ていることから、笑った方が、体調やパフォーマンスなどで好影響につながる。

○　周知について、子どもたちには、ゲームと掛け合わせていくことも可能性として面白い。また、周知は、計画を作成する過程からスタートしていくよう模索していくべき。

○　７教振の策定は、無限大の可能性の種を植えていることであるので、皆さん自身もワクワクしてこの計画を作っていただきたい。

【石沢委員】

○　骨子案では、子供たちが主語になるように考えられているため、地域の人がそこに合わせていくような印象を受ける。７教振は、地域の人たちにとっても、他者と関わることで自分自身の学びの機会になり、地域が良くなることにつながり（例えば、地元の会社に子どもたちが魅力を感じて働いてくれるなど）、巡り巡って自分たちに返ってくるものであることを感じて欲しい。

○　「県民みんなでチャレンジ！」の言葉は、どの年代からも自分事として感じてもらうとすると、年代や立場によって認識や行動範囲が変わってくるので、年代や状況に合わせてフレーズをカスタムできるといい。

○　「協働」について、出会いによって相手を知ることから始まり、互いがわかってきた上で、協働して一緒に何ができるかを考えることになることも考慮

した内容になると良い。

○　これまで山形県では、学校教育を中心とした教育振興計画と同時に生涯学習振興計画の２つの柱があったが、それを一体化して、生涯学んでいく中に学校教育、社会教育があるという観点で統一するような形になるとすると、子どもたちの主体な学びと大人世代の教育や主体的な学びなどについて、丁寧に説明していく必要がある。

○　７教振の骨子が形になってきている中で、自分事になるよう通称のようなものがあっても面白い。

【澤邉委員】

○　「県民みんなでチャレンジ！」はインパクトがあり、とても伝わってくるものの、その後の説明は、「家庭や地域の大人が、ねらいがうまく伝わるよう様々な形で接していこう」のようなメッセージでいいのではないか。みんなで子どもたちを見守り、応援し、一緒にやっていくということが伝わればいい。

○　「県民みんなでチャレンジ！」にあるそれぞれの立場の内容は普通のことではあるが、その普通のこと、当たり前のことがなかなか難しくなってきていることから、このような今回の計画となっていると改めて思った。

【末永委員】

○　具体的な８つのアクションについて、全体のコンセプトから見て、どういった状態だったら達成したと言えるのか、定量的に定性的にどの水準まで達したら良いと考えるのか、これから検討が必要になる。

○　「県民みんなのチャレンジ！」の部分については、ウェルビーイングを達成していく上で、主体的に自分の力を活かして、かつ適切な難易度でチャレンジしている時の没頭感は、私自身も充実感としてわかるので、この４つにまとめたことは、非常に素晴らしいアイデアである。これを現場レベルで統一感を持っていけるよう、どう現場に落とし込もうかといった部分では、客観的に見える指標にすべきかどうかも含めて、考えていくべき。

【髙井委員】

○　子どもは本来当事者であるものの、小さいときからなんとなく目に見えない幅広い道を歩いていく中で、当事者意識が失われていくと感じており、チャレンジの４つは、その道を壊し、自分で作っていく力を育てていけるような取り組みイメージになっている。

○　地域の当事者意識については醸成されづらいので、インセンティブ、予算のつけ方が、少なくとも最初の方で必要である。それが文化になっていけば良い。

○　保護者、家庭も当事者でありながら、活動機会を選択したとしても、その団体に任せる形になりがちであり、一緒に参画し、学ぶ機会が必要。

○　骨子案について、教育者に対してのメッセージも必要である。

【玉井委員】

○　「みんなで取り組む」というのは大事であり、広い意味で言うと、インクルーシブであるべきなのだろう。SDGｓの取り組み目標でもあるが、「誰も取り残さないでみんなでやっていく」ということを、より強調する形が望ましい。

【寺脇委員】

○　「体験」「探究」「尊重」「協働」の４つのチャレンジと、「幸せの４因子」の関係性を表現するためには、四象限にまとめてはいかがか。

○　アクション６の教育 DX の部分では、学校での生成 AI の扱いとして、初等教育においては、2023 年 7 月の文科省によるガイドラインでは、生成 AI は小学校では教科の学習の中で補助的に使うものとして位置づけられている。また、チャット GPT は 13 歳以下の使用は禁止されていることも考慮して骨子案で表現していくなど、信頼性を担保する工夫が必要。

○　アクション６の「教育ＤＸで実現する」について、その場所に行くこと自体が困難な子への対応として、メタバースを使うなどといった点をもう少し強調してもよい。

【内藤委員】

○　周知については、骨子案を伝えて、知ってから、何をしてもらうのかを事前に描いておかないと、周知の手段や内容などが紐付いてこない。

○　例えば、子どもたちの周知には、ゲーム感覚なものでも面白い。企業については、インセンティブとして、企業向け認証などもあるだろう。

○　一般の人たち向けの周知の考え方としては、まず、認知からスタートするが、こんなにたくさんの言葉は必要なく、県民に刺さる言葉によって存在を知ってもらうことが重要になる。そして、興味関心を持った人たちは、そのメッセージについて、何かしらの情報を探そうとして、いろいろな情報をもとに比較検討をしながら、さらに情報を探すために誰かに話すという行動に変わっていく。周知を目的とするのであれば、この広げてくれるというところまでをしっかりデザインをしていくことが大切である。

○　今後、7 教振をどうやって県民の人たちに届けるかと考えた場合に、最終的に県民のウェルビーイングを掲げ、ポジティブなことをやろうとしているのであれば、この会議からもっと開かれた方が良い。

【中西委員】

○　骨子案はだいぶわかりやすくなり、それぞれの立場に対して、それぞれの言葉があり、伝わりやすくなった。

○　方針やアクションの取組みは、５年を経ずに追い越されてしまっている可能性もあるので、最終のゴールではない形での書き方として、常にゴールを前に動かせるものはどうか。

○　方針・アクションの内容は、どれもいわゆる学生や教育の現場、地域や企業に向けての内容であるが、アクション５⑩「生涯学び、活躍できる環境整備」は、他のものとの距離感がちょっと違う気がする。例えば、環境整備は誰がするのかなど、県民のみんなでやっていこうというスタンスになるのかどうか、他の委員の皆さんのお考えもお聞きしたい。

【藤川委員】

○　「みんなでチャレンジ！」の言葉は、当たり前の口癖くらいのものとして、前野教授の「幸せの研究における分類例」（参考資料１）の「やってみよう」、「ありのままに」のような平仮名５・６文字といった形も良いのではないか。対面形式の意見交換会の時に、児童生徒にこの言葉にしっくりくるのかを聞いてほしい。

○　「取り組みのイメージ」の内容のような「学校や子どもたちはこうあるべき」という考えから抜け出したい。「なんとかなる」がみんなの口癖になり、「今、あなたらしくなっているかな？」という思いをみんなが持つことにつながるものが良い。

○　先生方や子どもたちと関わる大人が、「常に幸せであるか」、「楽しいと思って生きているか」や「笑顔であるか」などを、しっかりと確認し合い、検討をして、先生方と管理職も納得感を持っている状況ができるととてもいい。

○　今回の議論でどこまで概念の話をしていき、残り３回の会議でどのように議論を進めていくのか。また、６教振のように 150 ページほどのものが必要なのか、イメージもすり合わせが必要である。

○　ボリューム感としては、対話を通して、みんな一人一人のやりたいことが発言でき、それを周りが受け入れる環境があるといったことでいいのではないか。

○　４つのチャレンジが、どれだけ現場や子どもたち、県民の皆さん一人ひとりに落ちるか、発信について考えるグループも必要だろう。

○　６月に飽海地区校長会で研修会の講師として、７教振の進捗や目指すものについて話してほしいとの依頼があった。担当者には、これらについて、７カフェや検討委員会も見ることができるのではないかと伝えたところである。

【三浦委員長】

○　学校教育の中では、「社会に開かれた教育課程」という言葉が使われており、学校を中心として子どもの教育を担ってきていたが、家庭や社会の力を活かして子どもたちを育てていき、それが子どもたちにとっても、地域にとっても大事なことだという共通理解に立っている。

○　これまでの教育振興計画は、学校が主になることが多かったが、「県民でみんなチャレンジ！」の４つの柱を設けて取り組む方向性を示すことで、「社会に開かれた」というところをしっかりと組み立てていくことができる。

○　「体験」「探究」「尊重」「協働」は、目指す方向性を強く打ち出すものであるわけだが、それに続く言葉もかなりレベルが高い。また、４つのタイトルの言葉に、どうしてもなじめない状況にある子どもがいることにどう配慮していくか、文言のレベルの調整が必要。

○　「子どもだけの世界」から「大人も一緒に」というようにかなり踏み込んではいるものの、まだ弱いところもあるかもしれない。「社会に開かれた」の意味するところが「みんなで作っていく」イメージに近づいていければと思う。

【村山委員】

○　自分を大切にするには大切にされた経験のないとできない。苦しんでいる子ども、多様な子どもが増えているという現状を地域の人たちがまず理解することから始めるべき。いくら学校や教育が変わっても、地域の人々の理解が深まり広がらなければ、偏見の中でとても苦しい思いをしている人がたくさんいる状況は変わらない。

○　「体験」の家庭の「子どもたちを様々な体験に送り出す」について、まず子供の意見を聞き、やりたいことを挑戦させるとなるのではないか。

○　また、「協働」の「みんな笑顔で」について、笑顔でいられない子はダメという印象をもってしまうので、協働することは多様な人に出会うことによる違和感をも超えていくといった視点も含めて、違う言葉があったらいい。

○　資料１の２枚目のアクションについては、子供の声を聞いてくれる人がもっと増えれば、自分はダメだと思っていたことが意外と違う人に話を聞いてみてもらったら、違ったということもつながるのではないか。

【矢野委員】

○　ウェルビーイングを目指すための挑戦について、４つのチャレンジとしてまとめた内容は、学問的にウェルビーイングに至るスキル力とも関連しており、わかりやすい表現で書かれている。

○　自分のコンフォートゾーン（快適な空間）からはみ出すような、ある種不快な面、体験や状態を心地よく思える人がウェルビーイングな状態である。日本が停滞してしまった要因として、コンフォート（快適）だけを追い求めて、安心安全を大事にしたこともある。アンカンファタブル（不快適）ゾーンでも安心を作れるぐらいのキャラクタースキルをもった人間を作りさえすれば、具体的な行動などの情報は、今の時代、公的に与える必要がないぐらいにある。このようなキャラクタースキルを、学校で習うようなコグニティブ（認知）スキルとは別なものとして、中長期にわたって育成していくことがウェルビーイングの根幹にある。

○　そのために、様々な体験に飛び込んだり、わからないことをさらに学んでみたりをする中で、自然に間違うことがあったり、失敗することがあったり、恥ずかしい思いをしたりして、学んでいくものと考える。さらに一緒に作ろうと

協働するということは、そこにはアンカンファタブルもある。そのアンカンファタブルをむしろカンファタブル（快適）に感じるような人材を山形県の中に増やすよう子供の時代から環境づくりをしていけば、今の情報化時代にいくらでも世の中の情報がその人を育ててくれる。

【小関教育委員】

○　今回の計画は、とてもよくまとまっており、ありがたく思っている。

○　評価について、一般的にＰＤＣＡで言うと、教育振興計画がプランで、計画に基づいてチャレンジをし、次にチェックをして、その後のアクションとなるが、チェックの指標となるのは、ウェルビーイングを実感できる状態になっているか、チャレンジしたことによってウェルビーイングになっているかというところになる。

○　企業のインセンティブは必要であり、例えば、７教振に基づいて、教育に熱心に関わってくれる企業がマークや認証なりが得られ、それが地域に広く認知されていくと良い。

○　リアルタイムの配信が差し障りあるとすれば、今まで頑張ったことを動画にまとめ、だれが、どんな思いで、こういうことを作ったのかをまとめたらいい。ＮＨＫ山形局ではローカル番組のネタを探しているので、うまく取り込めればすばらしいものができるかもしれない。

【工藤教育委員】

○　骨子案は、これまで重ねてきた話し合いがしっかりと盛り込まれている。これをどのように県民に伝えていくかが本当に重要である。伝えていくときに、子供たちや保護者にアプローチしていくために、ローカルのメディアなどとのタイアップもアイデアの他にも、紙芝居のようなものでもいいだろう。

○　様々な分野で、この計画をもとにして取り組んでいくときに、他人事ではなく誰もが自分事と捉えられるようなアプローチを進めていく必要がある。

【和田教育委員】

○　山形に帰ってきたい、山形のために何かしたい、そういう故郷であることが大事であり、教育の観点から７教振の中で、一番忘れてはいけないことである。

○　ただ、肩に力が入ってしまうと何事も難しくなるので、「なんとかなる」という気持ちを大人も子供も持ち、「大丈夫だよ」という声がけをしていきたい。

○　今後、その地域企業の受け皿のリストアップも大事だろう。

○　ものづくりをする企業の一人として様々な年代のお子さん方と実は一緒に活動している。例えば、小学校６年生の卒業記念としての日本酒造り体験、中学校の３日間のキャリア体験の受け入れ、地元谷地高校百周年記念事業としての生徒と一緒の日本酒の仕込み・ラベル作成・販売、女性を主体とした「乙女」のお酒造り、男性を中心とした「アガスケ」のお酒造り、河北町のひなカ

レッジという独自の町民学校でのお年寄りのお酒造りなど、５世代の方々と一緒にお酒造りをさせていただいた。このような体験などの受け入れから、ワクワクを共感することができ、企業としても大変ありがたい経験となった。

【丹治教育委員】

○　子どもはこう育てようと思ってもそうは育たないもので、子どもが育ちたいよう、好きなものや得意なものなどを選べる環境を整えることが大事である。

○　選択を応援する周りの大人たちや友達、地域は、わがまま・ありのままを認める・受け入れることがスタートであり、教えるのではなく大人も子どもも一緒に楽しむ・考える・悩むということが大事である。

○　物事を進めるときに、子どもの視点や子ども自身の存在が抜けてしまう場合があるので、取組みを進めるときには、チェックしたり、配慮したりすることが必要である。

○　この計画が、いかに地域社会の中で自分事として浸透し、様々な人が関わっていけるかを考えるときに、失敗が許され、失敗してもまた挑戦できるよう、大人が様々なやり方や手段を準備していくことも大事な環境づくりとなる。